

創作ダンスにおけるユニゾンに関する研究
—全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)
の受賞作品に着目して—

天野絵美(筑波大学大学院)

1. 研究背景・目的

創作ダンスに関しては、「創作することは、適当な要素を集め、それらを関連させ、融合させることによって『何か』を形づくること」(スミス, 1984, p. 3)、「グループで活動により、他の人のアイデアが刺激となり、そこからまた違ったアイデアが生まれ」(柴, 2018, p. 66) するなど述べられており、創作ダンスとは個人または他者とで自由に動きを創り出し踊ることであると考えられる。特に学生の創作するダンスには、学生ならではのアイデアやユーモアが組み込まれ、年々多様なダンスが生まれてきているように思われる。

そこで本研究では、自主的に創作活動を行う大学生の創作ダンスを対象に、多くの群舞作品に組み込まれているユニゾンに着目する。

ユニゾンとは「グループで一定の動きが同時になされること」(スミス, 1984, p. 67) と述べられている。ユニゾンが用いられる背景には「同じ運動を行う舞踊手が多ければ多いほど訴える力が大きくなる」(ブラムら, 2005, p. 319) 等の理由があると考えられる。さらに、集団の中にある「ソロの姿は、非常に訴える力が強くなる、(中略) その主張は複雑さを加え、興味をかき立てることによって集団の力をも際立たせ強調する」(ブラムら, 2005, pp. 322-323) 等の効果をもつことが述べられている。以上のことから、ユニゾンにはより強く観る人に訴える力があることがわかる。

そのような中で、オリジナルのアイデアをもって創作することを目指していると思われる大学生の創作ダンスのユニゾンでは、どのように構成展開するものがあるのだろうか。さらに時代とともに学生の生み出すダンスにも、変化があるのではないだろうか。このような長期的な視点で大学生のユニゾンに着目した研究は見られない。

そこで本研究では、一定の評価を受けた大学生の舞踊作品でのユニゾンを対象にし、これまでの大学生の創るユニゾンの構成には、どのような創意をもって展開されてきていたのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

「全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)」の第1~30回大会創作コンクール部門大学の部における上位4つの受賞作品を調査対象

とした。また本研究では、作品後半の中で、最も多い人数が一斉に揃い踊るところから、次の構成が展開されるまでをユニゾンとした。

調査項目は頭川ら(1990)、高野(1995)を参考に以下の通りとした。

- 1) ユニゾンの時間(開始・終了時間)
- 2) 構成(空間・顔の向き・人数・動き)
 - ・ユニゾンが始まる前
 - ・ユニゾン
 - ・ユニゾンが終わった後

以上を作品毎に秒数を表し、各作品の特徴をテキスト化し分析した。

3. 結果と考察

- 1) ユニゾンの隊形は主に中心を基点として全体に広がっているものが多くみられた。
- 2) ユニゾンの始めは舞台の中心に一度ダンサーが集まってから点在に広がることが多くみられた。
- 3) ユニゾンの終わりには、それぞれのダンサーの動きの向きやタイミングがランダムになる等、揃えない動きの構成になることが多く見受けられた。この構成には「秩序をもたない力は、その摩擦による発火のような強大な力を感じさせる」(松本, 2010, p. 20) などの効果をもつことが考えられる。
- 4) ユニゾンの中には、一斉にタイミングと向きが揃い踊る構成の他、途中に変化を入れるものが多いことが明らかになった。

変化とは2群になる、ソリストやリフトが出現する、2人組や3人組の踊りになる、タイミングが同じで動きの形が異なる、動きが同じで身体の向きが異なる、踊る位置を移動する、隊形を変える、ダンサーの人数が増減する、ユニゾンの中を通り抜ける小群が現れる等がみられた。

(参考文献)

- ・ブラム, L. A.・チャプリン, L. T. : 確井節子訳(2005) 舞踊創作の技法—身体運動の根源に触れる. 新宿書房: 東京.
- ・松本千代栄(2010) 松本千代栄撰集 第2期 - 研究編 2. 舞踊運動学領域「運動と表現」. 舞踊文化と教育研究の会編, 明治図書出版株式会社: 東京.
- ・柴真理子編著(2018) 臨床舞踊学への誘い—身体表現の力—. ミネルヴァ書房: 京都.
- ・スミス, J. M. : 林悦子・島内敏子訳(1984) ダンス創作テクニック. 大修館書店: 東京.
- ・高野牧子(1995)『緑のテーブル』作品研究. 舞踊学, 1995(17): 1-10.
- ・頭川昭子・林裕子・松浦義行・若松美黄・和田伊通子(1990) 国際創作舞踊コンクールにおける入賞作品の一傾向. 体育科学系紀要, 13: 91-99.